

# 砂漠に咲いた一輪の花を枯らすな —青石中学校の実践—

八幡浜市

青石中学校は、昭和 40（1965）年、八幡浜市立日土中学校と保内町立喜須来中学校が統合してできた共立の学校としてスタートした。この地は、美しい山と海に囲まれていると同時に、昔ながらの慣習や考え方も根強く残っていた。



青石中学校

昭和 47（1972）年から 2 年間、文部省の同和教育研究指定校として取組を行っており、その実践は「砂漠の中に咲いた一輪のコスモスのような心境であった」と当時の三好常喜校長が振り返っている。

昭和 40 年代は、愛媛県で同和教育問題を正面にすえて学習することはタブーとされており、教科書の中にさえまだ同和教育問題が記述されていない時代であった。そんなときに三好校長は、「部落のお父さん、お母さんの願いを私たち教師自らの願いと受け止め、教育の課題として実践していきたい」という決意を表明し、同和教育地区の生徒が高等学校に合格する学力を全ての生徒に保障するという取組を始めた。学校においては、一人一人を大切に、分かる授業の研究と実践、地域においては、部落差別のための学力の遅れを取り戻す学習会を精力的に行った。

指定を受けて 2 年目には全学年で同和教育問題学習に取り組んだが、生徒や保護者からの反発も強かった。しかし、「寝た子を起こすな」「子どもに同和教育問題を教える必要はない」という、これまでの流れに逆らうように、青石中学校の教職員は、全ての子どもを正しく起こして、部落差別にたくましく立ち向かって生きられるようにと指導を行った。同和教育問題集中学習や人権強調週間の設置を行ったのも、青石中学校が初めてである。生徒会主催の人権弁論大会も毎年行われるようになった。この教師たちの実践により、同和教育問題学習に消極的であった生徒たちも大きく変わりはじめ、さらに、教職員の熱意と生徒たちのたくましい立ち上がり、父母たちや被差別部落の親たち一人一人の心を揺り動かし、変えていった。

この青石中学校の実践は、県内の教職員に勇気と展望を与えた。あたかも、不毛の地と思われていたところに同和教育の花をみごとに咲かせたのである。研究発表会に集まった 500 名の人々、その話を伝え聞いた人々の中から、「砂漠の中に咲いた一輪の花を枯らすな」と、同和教育の火を自校に点火する努力が始まったのである。

[参考資料]

愛媛県同和教育対策協議会 『愛媛の部落解放史』